



Title	既婚女性の人生満足感 : 過去の分業意識と職業経歴が与える影響
Author(s)	乾, 順子
Citation	年報人間科学. 2013, 34, p. 39-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈論文〉

既婚女性の人生満足感

——過去の分業意識と職業経歴が与える影響——

乾 順子

要旨

本稿の目的は、既婚女性の人生満足度に着目し、過去における性別分業意識と働き方が、既婚女性の中高年期の人生満足度にどのような影響を与えるかを明らかにすることである。

一時点における生活満足度と従業上の地位・性別役割分業意識との関連については、意識と働き方が一致しているもの、つまり分業賛成と無職、分業反対とフルタイムであるものの生活満足度が高いという分析結果がある。しかし、パートという分業意識と一致しているかどうか不明確な就業形態については、その関連が明らかにされてはいなかった。

また、人生後期の人生を振り返っての満足感と、変更不可能な過去の意識と働き方の関連についての分析もこれまでなされてこなかった。

これらは、日本における既婚女性のパート就業率の高さやその多様さを鑑みても、今後の女性就業や雇用政策、家族政策などを考える上でも重要な課題であると考えられる。

そこで本稿では、1982年と2006年の2時点で実施されたパネル調査データを使用し、過去の分業意識と働き方がその後の中高年期の人生満足度に対して影響を与えるかについての分析を行った。その結果、過去の分業意識をコントロールしても、「パート型」のものの人生満足度が最も低かった。さらに、分業意識と職業経歴の交互作用を検討したところ、平等志向の強い「パート型」のものにおいてさらに人生満足度が低くなることが明らかとなった。

キーワード

人生満足度、分業意識、パートタイム、パネルデータ

I. 問題設定

本稿の目的は、女性の就業に関する規範や制度が大きく変化した80年代にパート就業を経験した既婚女性の人生全体に対する評価、すなわち人生満足度に着目し、過去における性別分業についての意識とそれが実現した者、そうでない者の間に満足度の差異があるのかを明らかにすることである。

日本においては、1960年代の高度成長期に、製造業を中心とした既婚女性のパートタイム就業が徐々に定着し、70年代の低成長期には、女性フルタイム労働者のパートタイム労働者への切り替えが積極的に行われるようになってきた(井上2003:124)。

パート就業者に既婚女性が多いことはよく知られており¹⁾、日本の企業は、一方で女性を家庭につなぎとめておきながら、他方で低賃金かつ流動性の高いパートタイム労働者として、その労働力を活用してき

たのである（森岡 1995）。対して女性の側も、近代家族における根強い性別分業規範のもと、家庭内で割り当てられた家事・育児との両立を前提にパート就業へと参入していった。これを木本（1995）は、家族と企業社会の一種の「共犯関係」と呼んでいるが、このように女性のパート就業者の割合が高いことは、女性自身が家庭と仕事の両立を目指して自発的にパートという就業形態を選択していることを示すものなのであろうか。

確かに、中高年女性の希望する割合が高い雇用形態はパートタイマーであるというデータもある。平成14年（2002年）の就業構造基本調査によれば、45歳以上の中高年女性が希望する雇用形態で最も割合が高いのは「パート・アルバイト・契約社員」で70.2%を占めている（厚生労働省雇用均等・児童家庭局編2006）。また、実際にパートタイマーで就労する人々が、現在の勤務形態を選んだ理由として、「余暇時間や自分の時間を大切にしたいため、都合のよい時間に働けたり、勤務時間・日数が短いから」が最も多く38.1%、ついで「家事・育児、介護などがあるため、都合のよい時間に働けたり、勤務時間・日数が短いから」が37.7%と、自発的理由が75.8%を占める（野間1997）。このデータからは、既婚女性自身が家庭と仕事の両立を目指して自発的にパートという就業形態を選んでいるようにみえる。

パートを希望し自発的にパートの職に就いたものは、当然、満足度も高いと考えられるが、パートの職に就いた人は、本当に満足度が高いのだろうか。本稿は、パートという職業経歴と中高年女性の満足度の関連を検討する。その際、ライフコース論の観点を取り入れ、中高年期の人生を振り返っての満足感は、過去の分業意識や職業経歴によって影響を受けると考える（Moen et al. 1992; Elder and Liker 1982 ほか）。このような過去の意識の影響についての分析を行うためには、パネル調査データが最適であるため、本稿では2時点におけるパネル調査データを用いて分析を行う。第1波時点は1982年、第2波時点は2006年であり、第1波時点である82年とは、男女雇用機会均等法成立以前で分業肯定派がまだ多数派であった時代である。さらに、第2波時点は均等法施行後20年以上が経過し、分業反対派が多数派を占めるようになった。この間を既婚者として生きてきた女性たちは、どのような意識をもち、どのように働き、そしてどのように自分の人生を評価しているのであろうか。

II . 先行研究

1. 性別役割分業意識と女性の働き方および満足感

日本の先行研究においては、雇用形態が本人の志向と一致しているときに生活満足度が高まることが指摘されてきた。例えば、尾嶋（2000）では、1985年、95年の30代、40代有配偶女性の生活満足度について分析している。85年では、分業賛成派の専業主婦や分業反対派のフルタイム就業者のように分業意識と行動が一致している人の満足度が平均的には高くなり、意識と行動が一致すれば生活満足度は高まるという結果であった²⁾。

また、中山（2008）は、「夫は外で働き、妻は家庭を守る」に対して、一般論として賛成か反対か、自分自身の生き方としてのぞむかのぞまないかの2つに分け、前者を性別役割分業意識の「一般論」、後者を「個

人論」とし、従業上の地位と「一般論」「個人論」の一致・不一致、生活満足感の関連について分析している。その結果、性別役割分業の意識と実態が整合的であることが生活満足感を規定する要因の1つとなっていることを明らかにした。中山（2008）の分析もまた、尾嶋（2000）の85年の分析結果と同様、分業賛成と専業主婦、分業反対と常勤であることが意識と実態が一致しているとみなされている。

アメリカにおいても同様の結果が得られている。Faver（1982）は、アメリカの22歳から64歳の女性を対象とした調査を行い、仕事・家庭に対する価値観、実際の地位そして、主観的な生活満足感の関連を分析している。女性たちを3つの年齢別コーホート（22～34歳、35～44歳、45～64歳）に分け、既婚・未婚、従業上の地位、仕事と家庭のどちらを重視するかの関連を分散分析した結果、重視しているものと実際の家庭状況や職業状況が一致しない者が、もっとも満足感が低かった。たとえば、45～64歳のコーホートにおいては、「仕事に低い価値しかおいていない独身女性」と「仕事に高い価値をおいている無職の既婚女性」で最も満足感が低かった。つまり、女性の仕事や家庭に対する価値観は、職場や家庭における地位と生活満足感の間を媒介していると考えられるのである。

しかしながら、これまでの研究では性別役割分業意識およびパートという就業形態と満足感の関連については明確ではなかった。その理由として、パートという働き方が、フルタイムと無職の間に位置し、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」という一般的に性別役割分業意識を肯定しているものと否定しているものどちらと一致しているといえるのかが明確ではないことが考えられる。そこで本稿では、一般的な性別役割分業意識とは異なる、より限定的な分業意識を用いる。

2. 主観的幸福感・満足感・人生満足感の研究

これまで、主観的幸福感・満足感・人生満足度の研究は社会学を始め、心理学、医学（公衆衛生）などの分野で行われてきた。主観的幸福感の研究の蓄積は数多いが、それは主として、主観的幸福感（subjective-wellbeing）とは何かを因子構造から把握するもの（たとえば 古谷野ほか1990；和田1981；藤田1981；Lawton1975）とその規定要因を探るものに大別される（たとえば 宍戸2007；平山・柏木2005；古谷野1993）。主観的幸福感とは、人々が感情・認識として生活・人生を評価することである。それは人々が幸せ、平和、達成、そして人生満足とよぶものを含む（Diener et al.2003）。

古谷野ら（1990）は、老年期の主観的幸福感の構成概念³⁾を、George（1981）にならい、①「認知であるか感情であるか」、②「短期的なものであるか長期的なものであるか」の2軸にそって整理し、国内の2地点におけるサンプルを用いて、9項目からなる生活満足度尺度A（LSIA）の因子構造の不変性と「主観的幸福感」の測定尺度としての構成概念妥当性を確認した。また、Diener et al.（1985）は、5項目からなる人生満足度尺度（①多くの点で私の人生は理想に近い、②私のまわりの環境は非常にめぐまれている、③自分の人生に満足している、④今までのところ、私は、人生で重要なものを手に入れた、⑤私が死ぬとき、悔いを残すことはないだろう）を作成している。

また、高齢者の主観的幸福感の要因分析の結果は、対象集団の違いによらず、ほぼ一定していることが知られており（古谷野1993）、健康度や社会経済的地位と社会的活動の3つが最も大きな要因である（Larson

1978)。

一方で、Moen et al. (1992) は、人生後期の社会的統合や健康は成年期全体の選択と経験を反映している可能性があるとしている。そうであるならば、中高年期の人生満足感は過去の選択と経験を反映しているだろう。さらにライフコース論の観点からも、中高年期の人生を振り返っての満足感は、過去の分業意識や職業経歴によって影響を受けると考えられる (Moen et al.1992; Elder and Liker 1982 ほか)。

そこで本稿では、1 時点の「生活満足度」ではなく、長期的な人生全体に対する評価として「人生満足度」という指標を用いることとする。

Ⅲ . 分析視角と仮説

以上のことから本稿では、まず、分業意識の分割を行う。すなわち、夫と妻の家庭における家事育児分担の責任がどの程度あると考えるか＝「家事分担志向」と世帯収入を得る責任がどの程度あると考えるか＝「共働き志向」の2つである。このことにより、夫と妻が家庭と労働市場においてそれぞれの程度の責任を担うべきと考えているかが明確となる。そして、分業意識と働き方が一致していれば、人生を振り返っての満足感が高くなり、一致していなければ満足感が低くなると予想される。

これまで用いられてきた「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」に賛成するものは、当然「家事分担志向」は低いと言える。逆に、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」に反対するものは、「家事分担志向」が高いのか、あるいは女性も外で働くべきと考えているのかどちらかの2つの可能性が考えられる。したがって、「家事分担志向」を用いるほうが、より狭い範囲の厳密な性別分業に対する意識を測定することができるといえる。つまり、「家事分担志向」が高ければ、夫が妻と同程度に家事育児分担をする必要があると考えているということであり、家庭における家事育児の平等な分担を志向しているとみなすことができる。

パート就業者が家庭責任を果たすために、自発的にパート就業を選択しているのであれば、家庭における平等な家事育児分担を志向しないことが予想される。ゆえに、「家事分担志向」が高いこととパートで働くことは意識と実態が一致していないとみなすことができ、「家事分担志向」が高いパート就業者は満足度が低いと予想されるのである。

同様に、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」に賛成のものは、「共働き志向」が低いと考えられ、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」に反対のものは、「共働き志向」が高いのではないかと予想できる。

「共働き志向」が高ければ、妻自身が夫と同程度に収入を得る責任があると考えているということであり、夫との労働市場における性別分業に反対とみなすことができる。ところが、「共働き志向」が高くてパート就業の場合、パート就業は低賃金であることが多く労働市場の周辺的な地位を占めるため、夫と同程度には収入を得ることができず、意識と実態の乖離が生じていると考えられるであろう。このことから、「共働き志向」が高いパート就業者は満足度が低いと予想される。

しかしながら、もしかすると、「共働き志向」が高いもの、すなわち、世帯収入を得る責任があると回

答するものの中には、伝統的な分業意識を肯定しつつも、市場労働を自ら担うのではなく、内助の功として妻も世帯収入を担う責任があると考えて、世帯収入を得る責任の一端を担っていると考えている可能性も考えられる。「共働き志向」については、やや解釈が複雑になる可能性もあるが、一般的に使用されてきた性別役割分業意識を分割することによって、これまでとらえられていなかった家事・育児の責任と世帯収入を得る責任の夫婦間の配分をどのように考えるのか、つまり、家事・育児と世帯収入責任についての平等志向がより明確になるのである。

さらに、満足感として、生活満足感ではなく、人生を振り返っての満足感＝「人生満足度」を従属変数として用いる。その理由は、本研究の趣旨には、長期的な人生に対する認知(George1981; 古谷野 1993 ほか)、すなわち「目標への到達度についての評価」および「一過性ではなく変化しにくい人生の評価」を従属変数とすることが望ましいからである。先行研究においては、9項目(生活満足度尺度 K)や5項目(人生満足度)からなる指標を用いて因子を作成しているが、本稿ではその両者に共通して、「認知—長期的」な「目標と現実の一致」を代表すると考えられる「人生を振り返って、まあ満足である」という項目に対する回答を従属変数とする。

以上のことを踏まえると、過去にいかなる分業意識を持っていた者が、その後どのような職業経歴をたどり、中高年期を迎えた現時点で人生を振り返って満足しているのかどうかを明らかにすることができる。本稿で検討すべき仮説は以下の3つである。

- (1) パートという職業経歴をたどった女性は仕事を家庭の両立がしやすかったことから、人生満足度が高い。
- (2) 「家事分担志向」が高くパートという職業経歴をたどった女性は、人生満足度が低い。
- (3) 「共働き志向」が高くパートという職業経歴をたどった女性は、人生満足度が低い。

IV. データと変数

1. データ

1979年の「職業と人間」調査と1982年の「主婦の生活と意識」調査のデータ及びその追跡調査として2006年から2007年に実施された「職業と家族とパーソナリティについての同一パネル追跡調査」データのうち、主に女性データを用いて分析を行う。1979年の「職業と人間」調査は東京大学文学部社会学研究室が行った調査であり、母集団は関東7都県(東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、群馬県、栃木県)に居住する26歳以上65歳以下で、1979年6月1日以降に1ヵ月以上仕事をしている男性であった。標本抽出は2段階層化無作為抽出法で行い、84地点、設計標本数は840であった。回収有効標本は629、回収率は74.9%であった。

1982年の「主婦の生活と意識」調査は東京都老人総合研究所が実施したもので、対象者は、1979年「職業と人間」調査に回答した者の配偶者である。

1979年の「職業と人間」調査の回答者629人中、調査当時妻があったものは549人、その中から「主

婦の生活と意識」調査時点で夫と死別、離別した者、関東7都県以外への転出を除いた者521人を設計標本とし、その80.2%にあたる418人の妻から回答を得た。この調査の回答者の年齢は調査実施時点で26歳から71歳までであり、平均年齢は44.7歳であった。以下では、1979年の「職業と人間」調査と1982年の「主婦の生活と意識」調査を第1波調査とよぶこととする。

第2波調査となる「職業と家族とパーソナリティについての同一パネル追跡調査」の実施主体は、大阪大学人間科学研究科社会環境学講座である。第1波調査の回答者男性629人、女性418人がベースとなった。その中から所在が確認できた者、さらにその中から面接調査が可能であるかを判断した結果選別された対象サンプルに対して、実査を行い、最終的に得られたサンプルは男性227人、女性152人であった。ベースサンプルを基準とした回収率は男性38.1%、女性36.4%であった。詳細は吉川(2012)を参照されたい。

したがって、第2波調査の女性有効回答者は152人で全員が既婚である。回答者は、1982年時点で27～68歳(平均42.47歳、標準偏差8.648)、2006年時点で52歳～93歳(平均66.71歳、標準偏差8.516)である。分析対象となる女性152人は第1波時点(1982年)で27～68歳であるが、その時点で就業できる可能性の高いものに限定するため、分析対象を82年時点で55歳以下のものとする。

分析対象者の概要は表1のとおりである。第1波調査時の居住地は直井(1984)によれば、東京23区:108人(25.8%)、横浜川崎:43人(10.3%)、その他の県庁所在地:33人(7.9%)、近郊郊外(千葉埼玉):65人(15.6%)、近郊郊外(東京神奈川):50人(12.0%)、地方都市:49人(11.7%)、郡部:70人(16.7%)であった。これと比較すると、第2波時点では、地方都市や郡部の割合が相対的に高まり、東京都特別区や横浜・川崎において割合が低下している。このような対象者の分布の偏りがあるため、分析結果の読み取りの際には注意が必要である。

2. 変数

本稿で使用する変数は以下のとおりである。

従属変数となる「人生満足度」は、「あなたのこれまでの生活について、あなたはどのように感じておられますか。あてはまるものに○をつけてください」という設問で「自分の人生をふりかえって、まあ満足だ」に対して、そう思う、ややそう思う、どちらとも言えない、あまりそう思わない、そう思わないという回答に、それぞれ5点から1点を与え、得点が高くなるほど「そう思う」となるように操作化したものを用いる。

分業に関する意識としては、家事育児分担についての意識として「家事分担やお子さんの世話について、ご主人にはどのくらい責任があると思いますか。」に対する回答、1妻と同じくらい責任がある、2かなり責任はあるが妻より少ない、を「家事分担志向高群」とし、3すこしは責任がある、4あまり責任がない、を「家事分担志向低群」とする。

表1 分析対象者の概要

年齢	度数	%	第2波世帯人員	度数	%
52～54	12	8.2	1	8	5.5
55～59	27	18.5	2	47	32.2
60～64	29	19.9	3	39	26.7
65～69	34	23.3	4	15	10.3
70～74	22	15.1	5	16	11.0
75～79	22	15.1	6～8	13	9.0
学歴	度数	%	不明	8	5.5
旧制高等小学校	10	6.8	第1波妻職業	度数	%
旧制高等女学校・実業学校・師範学校	15	10.3	専門職	7	4.8
旧制高校・高専・旧制女子大学	1	0.7	事務職	26	17.8
新制中学校	39	26.7	販売	12	8.2
新制高校	58	39.7	熟練マニュアル	10	6.8
新制短大・高専	16	11.0	半熟練マニュアル	22	15.1
新制大学（大学院を含む）	7	4.8	非熟練マニュアル	4	2.7
第1波調査時夫収入	度数	%	農業	17	11.6
0～300万円	65	44.5	無職	48	32.9
301～600万円	65	44.5	第2波調査時居住地	度数	%
601～900万円	9	6.2	東京都特別区	26	17.8
901～1200万円	4	2.7	横浜川崎	10	6.8
1201～2000万円	2	1.4	他の県庁所在地	18	12.3
不明	1	0.7	近郊郊外（千葉埼玉）	24	16.4
第2波調査時世帯収入	度数	%	近郊郊外（東京神奈川）	15	10.3
0～300万円	70	47.9	地方都市	27	18.5
301～600万円	41	28.1	郡部	26	17.8
601～900万円	15	10.3	合計	146	100.0
901～1200万円	14	9.6			
1201～2000万円	6	4.1			
合計	146	100.0			

さらにもうひとつ分業意識として、労働市場における収入を伴う労働を志向する意識を用いる。「あなたは、世帯収入を得ることに、自分にどれくらい責任があると感じていますか。」に対する回答、1夫と同じくらい責任がある。2かなり責任はあるが夫より少ない。を「共働き志向高群」、3すこしは責任がある。4あまり責任がない、を「共働き志向低群」とする。

最後に職業経歴の変数として、従業上の地位の変化に着目した分類を用いる。1982年から2006年までの従業上の地位の変遷を御船・重川（1999）にならってパターン分けしたもの（乾2009）のなかから、第1波（1982年）から5年間の職業経歴パターンを用いて分析する。乾（2009）による82年以降の分析対象者の職業経歴をみると、第1波から5年以内に職業経歴の移動がほとんど終わっていることが見て取れ、それ以降は無職化がその多くを占める。したがって本稿では、82年から5年間の職業経歴パターンが第1波時点以降の分析対象者の職歴を代表しているとみなし、それらを用いて分析を行うこととする。

職業経歴パターンは、正規継続、パート継続、自営家族継続、有職化、無職化、無職継続、その他の7パターンである。この内訳は、第1波調査の現職従業上の地位のうち1勤め（正規従業員）を「正規雇用」、2勤め（パート・臨時雇用・アルバイトなど）および5内職を「パート」、3自営業主・自由業および4家族従業者（自家営業に従事している）を「自営家族従業者」、非該当を「無職」とし、第2波調査の従業上の地位が2常時雇用されている一般従業者を「正規雇用」、3臨時雇用・パート・アルバイト、4派遣社員、5契約社員・嘱託、8内職を「パート」、1経営者（重役）、役員および6自営業主・自由業主、7家族従業

者を「自営家族従業者」、9 学生、10 無職を「無職」としている。

上記の7パターンのうち、正規継続を「正規型」、パート継続と有職化を「パート型」、自営家族継続を「自営家族型」、無職化と無職継続を「無職型」とする。その他は分析から除いている。

コントロール変数としては、「年齢」、「教育年数」、「第1波の夫の収入」、「第2波の世帯収入」を用いる。性別役割分業意識は年齢や学歴によって大きく異なり、また就業構造も時代によって異なることからコントロール変数として「年齢」⁴⁾、「教育年数」⁵⁾を用い、女性が就業するか否かは夫の収入によって左右され、夫の収入が多いほど妻は就業しないというダグラス=有沢の法則により「第1波の夫の収入」⁶⁾、生活満足度や幸福感は世帯収入によって規定される(六戸 2007) ことから「第2波の世帯収入」⁷⁾もコントロール変数として投入する。

表2 度数分布

		度数	有効%
人生満足度 「人生振り返って、まあ満足だ」	そう思う	46	33.8
	ややそう思う	51	37.5
	どちらともいえない	22	16.2
	あまりそうは思わない	13	9.6
	そうは思わない	4	2.9
	合計	136	100.0
職業経歴パターン	正規継続	18	12.9
	パート継続	20	14.4
	自営家族継続	45	32.4
	有職化	8	5.8
	無職化	7	5.0
	無職継続	41	29.5
合計	139	100.0	
職業経歴4パターン	正規型	18	12.9
	パート型	28	20.1
	自営家族型	45	32.4
	無職型	48	34.5
	合計	139	100.0
家事分担志向 「家事の分担やお子さんの世話について、ご主人はどのくらい責任があると思いますか。」	妻と同じくらい責任がある	36	24.7
	かなり責任はあるが妻より少ない	49	33.6
	すこしは責任がある	46	31.5
	あまり責任がない	15	10.3
	合計	146	100.0
共働き志向 「あなたは、世帯収入を得ることに自分にとどのくらい責任があると感じていますか。」	夫と同じくらい責任がある	23	16.1
	かなり責任はあるが夫より少ない	37	25.9
	すこしは責任がある	55	38.5
	あまり責任がない	28	19.6
	合計	143	100.0

表2は分析に用いる主要な変数の度数分布を示している。「人生満足度」については、3割程度が満足しており、ややそう思う、を含めると約7割が満足している。その一方でどちらともいえない、あまりそう思わない、そう思わない、を合わせて3割程度が満足していない。

次に、「職業経歴4パターン」を見ると、「無職型」が34.5%と最も多く、「正規型」が最も少なくなっている。「自営家族型」は「無職型」に次いで多くなっており、「パート型」は約2割である。「自営家族型」が多くなっている理由は、長期追跡パネル調査データの特性上、第1波時点で持ち家居住のものや夫の転勤がないものが住居を移動させず、第2波時点の調査で回答を得やすかったということが考えられる。

さらに、「家事分担志向」についてみると、家事や子どもの世話について、夫はかなり責任はあるが、妻より少ないと考えているものが最も多くなっているが、「家事分担志向」の高いものは6割近くにのぼっている。反対に「共働き志向」については、「低い」に分類されるものが約6割である。

次節では、過去の意識と職業経歴が人生満足度に与える影響をみていくこととする。

V. 分析

1. パート型は人生に満足しているのか

では、どのような職歴パターンをたどった者が人生に満足しているかを確認する。職業経歴パターンと「自分の人生を振り返って、まあ満足だ」に対する回答をクロス分析したところ、5%水準で有意差があった。最も満足度が低いのはパート型で、「そう思わない」と「ややそう思わない」を合わせて30.8%が満足していないという結果であった。満足している割合（「そう思う」「ややそう思う」を合わせた割合）は46.2%である。それに対して「無職型」では「そう思う」だけで47.8%を占めており、「ややそう思う」を含めると80.4%が満足している。「正規型」「自営家族型」の満足の割合（「そう思う」「ややそう思う」を合わせた割合）は、それぞれ72.2%、76.9%であった。

自発的に選択している割合が高く、余暇や家事・育児・介護などと両立しやすいはずのパート型において、予想に反して人生満足度が低いのである。

2. 過去の意識と職業経歴は人生満足度に影響を与えるか

ではさらに過去の分業意識・職業経歴パターンと人生満足度の関連をみていこう。

図1は「家事分担志向」別・「共働き志向」別に職業経歴パターンごとの人生満足度を示したものである。

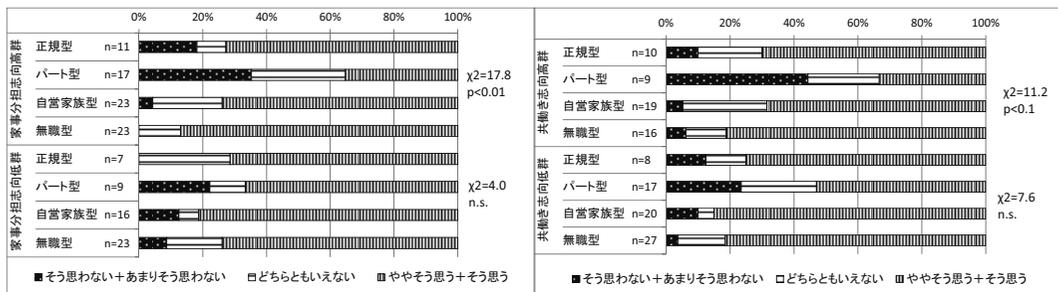


図1 職業経歴パターン別（家事分担志向別・共働き志向別）人生満足度

図1左の「家事分担志向」についてみていくと、「家事分担志向」高群において職業経歴パターン別に満足度に有意差があり、「パート型」の不満足度が最も高いことがわかる。「そう思わない」「あまりそう思わない」を合わせた割合は、35.3%である。「ややそう思う」「そう思う」を合計した満足しているものの割合は、3割強程度にとどまっている。次いで、「正規型」において不満なものの割合が高い。満足しているものの割合は「正規型」と「自営家族型」がそれぞれ72.7%と73.9%で同程度となっている。それに対して「家事分担志向」低群では職業経歴ごとに満足度に有意差はないが、やはり「パート型」において不満なものの割合がやや高くなっている。

図1右の「共働き志向」についてみていくと、「共働き志向」高群では、10%水準ではあるが、職業経歴パターン別に満足度に有意差がある。やはり、「パート型」が人生をふりかえてみて、まあ満足だと思っていない割合が高く、「そう思わない」と「あまりそう思わない」を合わせた割合は、44.4%である。そして最も満足度が高いのは、やはり「無職型」であり、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合は、81.3%となっている。「共働き志向」低群については有意差はないが、やはり「パート型」で不満である割合が高く、満足である割合が低くなっている。

図1の分析から、過去の分業についての意識と職業経歴によって人生満足度にちがいがみられることが分かったが、この意識のあり方が、人生満足度を左右する要因だといえるだろうか。そこで、他の要因をコントロールした上で、「家事分担志向」「共働き志向」と職業経歴パターンが人生満足度に与える影響を分析していくこととする。どちらの分析においても多重共線性については問題はないことを確認している。

表3 人生満足度に対する重回帰分析の結果

モデルⅠ		モデルⅡ		モデルⅠ		モデルⅡ			
非標準化係数	標準誤差	非標準化係数	標準誤差	非標準化係数	標準誤差	非標準化係数	標準誤差		
(定数)	0.875	1.325	1.100	1.320	(定数)	1.094	1.345	0.992	1.349
年齢	0.036 *	0.016	0.034 *	0.016	年齢	0.035 *	0.016	0.036 *	0.016
妻教育年数	0.049	0.052	0.024	0.054	妻教育年数	0.045	0.052	0.040	0.052
夫79年収入	0.000	0.000	0.000	0.000	夫79年収入	0.000	0.000	0.000	0.000
06年世帯収入全体	0.001 **	0.000	0.001 **	0.000	06年世帯収入全体	0.001 **	0.000	0.001 **	0.000
無職型(ref)	—	—	—	—	無職型(ref)	—	—	—	—
正規型	-0.293	0.298	-0.038	0.446	正規型	-0.262	0.304	-0.323	0.432
パート型	-0.726 **	0.261	-0.087	0.394	パート型	-0.751 **	0.260	-0.457	0.319
自営家族型	-0.408	0.236	-0.291	0.342	自営家族型	-0.402 +	0.239	-0.286	0.306
家事分担志向高ダミー	-0.028	0.188	0.371	0.315	共働き志向高ダミー	-0.167	0.188	0.125	0.333
正規型×家事分担志向高			-0.475	0.588	正規型×共働き志向高			-0.041	0.597
パート型×家事分担志向高			-1.134 *	0.527	パート型×共働き志向高			-0.862	0.539
自営家族型×家事分担志向高			-0.305	0.458	自営家族型×共働き志向高			-0.339	0.475
N	123		123		N	121		121	
F値	3.426 **		2.961 **		F値	3.409 **		2.736 **	
調整済みR ² 乗	0.137		0.150		調整済みR ² 乗	0.138		0.137	

**p<0.01, *p<0.05, +p<0.10

まず、家事分担志向・職業経歴と人生満足度の関連をみていく。

表3は人生満足度を従属変数とする重回帰分析の結果である。表3左側のモデルⅠをみると職業経歴パターンには有意な効果があり、過去の意識つまり「家事分担志向」をコントロールしても「パート型」において満足度が低くなっていることが分かる。さらに「家事分担志向」と職業経歴の交互作用項を投入したモデルⅡをみると、「家事分担志向」と「パート型」の交互作用に有意な効果があり、「パート型」の主効果の有意性が消え、非標準化係数の絶対値は0.726から0.087へと大きく低下している。「家事分担志向」

と「パート型」の交互作用の係数は-1.134であり、「家事分担志向」の高い「パート型」において人生満足度が最も低くなっている。さらに、モデルⅡでは、「パート型」の主効果が消えていることから、「家事分担志向」の低かった「パート型」の満足度は「フルタイム型」「無職型」と差がないといえる。

次に、共働き志向・職業経歴と人生満足度の関連をみていく（表3右側）。モデルⅠをみると、過去の「共働き志向」をコントロールしても「無職型」に比べ、「パート型」において満足度が有意に低くなっていることが分かる。さらにモデルⅠに職業経歴パターンと「共働き志向」の交互作用項を投入したモデルⅡでは、調整済みR²乗の値が0.001低下し、「パート型」の主効果が有意でなくなり、「共働き志向」と「パート型」の交互作用も有意ではない。

以上の分析によって明らかになったことは、「パート型」という職業経歴をたどったもののうち、過去において「家事分担志向」が高かったもの、つまり夫婦間の分業に否定的であったものは他のものに比べて人生満足度が低いということである。これは本稿において、夫婦間の家事育児分担についての過去の意識、世帯収入分担についての過去の意識を用いて分析したことによりはじめて明らかとなったものである。

また、「正規型」「自営家族型」「無職型」においては、過去の意識の高低によって人生満足度に差がないという結果であった。さらに「正規型」の人生満足度は、「無職型」と差はないといえる。これは、先行研究での知見、つまり、性別役割分業肯定の専業主婦と否定の常勤就業者の満足感が相対的に高いという結果とは一致しないものとなった。この点については、次節で考察していく。

VI. 議論と考察

本稿における仮説は(1)パートという職業経歴をたどった女性は仕事を家庭の両立がしやすかったことから、人生満足度が高い。(2)「家事分担志向」が高くパートという職業経歴をたどった女性は、人生満足度が低い。(3)「共働き志向」が高くパートという職業経歴をたどった女性は、人生満足度が低い。の3つであった。

本稿での分析の結果、仮説(1)は支持されず、反対に「パート型」のものは、「正規型」「自営家族型」「無職型」に比べ、満足度が低い傾向にあった。さらに、仮説(2)は支持され、「家事分担志向」が高い「パート型」のものが「家事分担志向」の低い「パート型」および「正規型」「自営家族型」「無職型」に比べて満足度が低いことも明らかになった。夫にも自分と同じ程度に家事育児の分担責任があると考えながら、パート就業をしていた主婦は、実際にはほとんど自分自身が家事・育児を分担しながら、パートでも働くという新・性別役割分業(樋口1985)を体現していたことが予測される。ここでは、分析結果を省略しているが、第1波(1982年)における家事分担(買い物、料理、掃除、修理について)を妻に聞いている。買い物、料理については、「全く妻」や「ほとんど妻」と回答する割合が高いが、なかでも「パート型」の女性では、買い物、料理の担当について「全く妻」か「ほとんど妻」と回答したものが100%であった。このような負担が、人生満足度を低下させたのであろう。

以上のことから「家事分担志向」という過去の意識変数を用いることによって、先行研究でこれまで明

らかにされてこなかった、過去の分業意識とパート就業及び人生後期の満足度の関連が明らかになったと言えよう。

仮説(3)については、支持されなかった。しかし、過去の「共働き志向」をコントロールしても「パート型」のものの人生満足度は「無職型」のものより有意に低かった。この結果は、先行研究のところでも触れたとおり、「共働き志向」が、労働市場において自分も有償労働を行い世帯収入を得る責任があると考えるものと内助の功として家事・育児責任を担うことによって世帯収入稼得に貢献するという意識が混在していたことも理由として考えられるだろう。

以上の結果からどのようなことが考えられるだろうか。本稿が分析対象とした調査の第1波時点である82年とは、均等法成立以前で分業肯定派がまだ多数派であった時代である。82年時にすでに結婚していた女性は、性別分業を肯定し、結婚すれば主婦になるという生き方が規範としても肯定され、社会制度もそれを後押ししていた時代を少なくとも結婚するまでは経験してきたといえるだろう。

その規範を内面化し、その規範(性別役割分業肯定)に沿う形で「無職型」という職業経歴をたどった既婚女性たちが中高年期を迎えても人生について相対的に満足している。一方でパートという職業形態を選択したものが相対的には満足度が低い。特に「家事分担志向」の高い女性においてその傾向は顕著である。

80年代に既婚女性が無職化すること、無職でつづけることは、それが可能であれば、規範にも合致し、生き易い選択肢であったのだろう。しかし、パートで働くことは、都合のよい時間に働き、家事育児とも両立できると考えられていたが、実際には満足感が高まることにはつながらず、負担となって満足度を下げることになっていった。これは、パートが働く職場環境によるものであるかもしれないし、また家庭における家事・育児分担の荷重によるものであるかもしれない。

また、先行研究の結果から予想された「家事分担志向」「共働き志向」の高い「正規型」の満足度が高いという点については、今回の分析結果からは支持されず、過去にどのような意識をもっていたとしても、第2波時点では、「正規型」は「無職型」と満足度に差がなかった。第2波調査時点の2006年における性別役割分業についての規範は第1波調査時点の1982年とは大きく変化している。今や法制度上は、男女ともに同等に働くことができる時代であり、男女共同参画の機運から、女性の就業が推奨される時代でもある。こうした時代の変化も後押しして、過去においてどのような意識をもっていたとしても、頑張ってきてよかったと振りかえることができているのかもしれない。

先行研究と異なる結果となった要因として、他に考えられることは、クロスセクショナルな調査では、実態を評価する際にその時点の意識と直接照らし合わせてしまったことによるものであるかもしれないし、実態に合わせて意識を変化させたものが、満足と回答したという可能性もある。尾嶋(2000)や中山(2008)の分析では、他の変数でコントロールされていなかったということも理由として考えられる。あるいは、本稿では、「男性は外で働き、女性は家を守るべき」という一般的な性別役割分業意識とは異なる指標を用いたこともその要因の1つと考えられる。

ここで、留保すべき点をあげておきたい。まず、サンプル数が非常に限られており、さらに長期追跡パネル調査データの制約から、第1波のサンプルから多くが脱落し、捕捉できたものは第1波時点で持ち家

に居住していたものの割合が高いというバイアスがある（田藤 2009）。そのため、第1波時点では、関東7都県でサンプリングを行っているが、母集団を関東7都県とは言い難いという点に注意が必要である。

さらに、分析では過去における人生満足感、生活満足感といったものが、コントロールされていない点にも注意すべきである。もともと人生満足感の高かったものが「無職型」であった可能性もあり、職業経歴だけの効果とは言い切れないため、今後の課題としたい。また、従業上の地位のみではなく、職業の具体的な内容についても考慮するべきであろう。

本稿では、ライフコース論の観点を取り入れ、過去の意識を分析に取り入れることによって、新たな知見を得ることができた。このためには、パネルデータが非常に有効であった。女性の就業や性別分業研究に新たな視角を提供することができたことが本稿の意義である。このような枠組みは、過去のライフコースイメージや家族観・分業に関する意識とその後の様々なイベントとの関連を分析する上でも有効となるだろう。

注

- 1) 労働力調査（総務省 2010）における雇用形態別の雇用者の構成割合の推移によれば、男性では、1985年にパート・アルバイト、派遣社員・嘱託の割合は7.4%であり、それ以降徐々に増加し、2009年には18.4%となっている。他方で、女性雇用者に占めるいわゆる非正規雇用割合は、1985年には32.1%、2003年には50.6%、2009年には53.3%にまで増加している。
- 2) しかし一方で、尾嶋（2000）の95年のデータの分析結果では、生活満足度に対する性別役割分業意識と就業形態の関連は弱まり、就業形態独自の影響が強くなっている。専業主婦と比較してフルタイム就業女性の満足度はどのような性別役割分業意識を持とうとも低くなる。
- 3) 主観的幸福感の測定尺度としては、Lawton（1975）の改訂 PGC モラル・スケールや生活満足度尺度 A が代表的であり、これらの尺度の下次元の分類を古谷野ほか（1989；1990）では行っている。
- 4) 第2波調査時点の満年齢とする。
- 5) 妻本人学歴「旧高等学校」：8年、「新制中学校」：9年、「旧制高等女学校・実業学校・師範学校」：15年、「新制高校」：12年、「旧制高校・高専・旧制女子大学、新制短大・高専」：14年、「新制大学（大学院含む）」：16年とする。
- 6) 第1波調査時点の過去1年間の収入のうち、各選択肢の中央値とする。
- 7) 第2波調査時の過去1年間の「仕事による収入」、「公的・私的年金」、「その他収入」に対する回答のうち各選択肢の中央値を合計したものとす。「わからない」や「無回答」を0とする。

付記

「職業と家族とパーソナリティについての同一パネル長期追跡調査（日本女性）」データの使用にあたっては大阪大学大学院人間科学研究科経験社会学研究室 SRDQ 事務局の許可を得た。

文献

- Diener, E., Oishi, S., Lucas, E. R., 2003, "Personality, Culture, and Subjective Well-being: Emotional and Cognitive Evaluations of Life," *Annual Review of Psychology*, 54:403-425.
- Diener, E., Robert, A. T., Randy, J. L., Sharon, G., 1985, "The Satisfaction With Life Scale," *Journal of Personality Assessment*, 49(1):71-75.

- Elder, G. H., Jr., and J. K. Liker, 1982, "Hard Times in Women's Lives: Historical Influences across Forty years," *American Journal of Sociology*, 88: 241-269.
- Faver, C.A., 1982, "Life Satisfaction and The Life-Cycle: The Effects of Values and Roles on Women's Well-Being," *Sociology and Social Research*, 66 (4): 435-451.
- 藤田綾子, 1981, 「生活満足度尺度 (LSI) の分析」『老年心理研究』7 (1) :1-11.
- George, L.K., 1981, "Subjective well-being: Conceptual and Methodological Issues," *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, (2): 345-382.
- 平山順子・柏木恵子, 2005, 「女性の生き方満足度を規定する心理的要因 —今、女性の“しあわせ”とは?—」『発達研究』19: 97-112.
- 樋口恵子, 1985, 「主婦という名の「座権」」『世界』, 478(8): 24-27.
- 井上信宏, 2003, 「第4章 戦後日本の労働市場政策の展開とジェンダー」竹中恵美子編『叢書 現代の社会とジェンダー 第2巻 労働とジェンダー』明石書店, 103-137.
- 乾順子, 2009, 「既婚者の職業経歴パターン—— 従業上の地位の経時的変化」吉川徹編『職業と家族とパーソナリティ についての同一パネル長期追跡調査』平成16年度～19年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書(研究課題番号16203031), 大阪大学: 263-276.
- 吉川徹, 2012, 「長期追跡パネル調査の全体像」吉川徹編著『長期追跡調査でみる日本人の意識変容——高度経済成長時代の仕事・家族・エイジング』ミネルヴァ書房, 2-19.
- 木本喜美子, 1995, 『家族・ジェンダー・企業社会——ジェンダー・アプローチの模索』ミネルヴァ書房.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局編, 2006, 『女性労働の分析 2005年中高年齢女性の就業実態と意識』.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男, 1989, 「生活満足度尺度の構造—主観的幸福感の多次元性とその測定—」『老年社会科学』11: 99-115.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男, 1990, 「生活満足度尺度の構造—因子構造の不変性—」『老年社会科学』12: 102-116.
- 古谷野亘, 1993, 「老後の幸福感の関連要因—構造方程式モデルによる全国データの解析—」『理論と方法』8(2): 111-125.
- Lawson, E., 1978, "Thirty years of research on the subjective well-being in older people," *Journal of Gerontology*, 33: 109-125.
- Lawton, M. P., 1975, "The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A Revision," *Journal of Gerontology*, 30(1): 85-89.
- 森岡孝二, 1995, 「戦後日本の社会変動と家族」基礎経済科学研究所編『働く女性と家族のいま 2 日本型企業社会と家族』青木出版, 13-42.
- 御船美智子・重川純子, 1999, 「妻の就業変化パターンと家計費・家計管理組織」樋口美雄・岩田正美編著『パネルデータからみた現代女性——結婚・出産・就業・消費・貯蓄』東洋経済新報社, 127-145.
- Moen, P., D. D.-McClain, and R. M. Williams, Jr., 1992, "Successful Aging: A Life-Course Perspective on Women's Multiple Roles and Health," *American Journal of Sociology*, 97(6): 1612-1638.
- 中山ちなみ, 2008, 「高学歴女性の就業と生活満足感——性別役割分業の意識と実態」『ノートルダム清心女子大学紀要』(ノートルダム清心女子大学), 32-1(43): 53-66.
- 直井道子編, 1984, 『老人との同別居と主婦の生活行動—関東七都県における調査報告』東京都老人総合研究所社会学部.
- 野間敦子, 1997, 「女性と仕事に関するアンケート」の結果」日本労働研究機構編『女性の職業とキャリア意識と就業行動に関する研究』日本労働研究機構(99): 5-93.
- 尾嶋史章, 2000, 「「理念」から「日常」へ——変容する性別役割分業意識」盛山和夫編『日本の階層システム4 ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会, 217-236.
- 穴戸邦章, 2007, 「高齢期における幸福感規定要因の男女差について——JGSS-2000 / 2001 統合データに基づく検討」大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編『日本版 General Social Surveys 研究論文集6——JGSSで見た日本人の意識と行動』大阪商業大学比較地域研究所: 45-56.

- 総務省統計局, 2010, 「労働力調査長期時系列データ(詳細集計)表9」, 総務省統計局ホームページ, (2010年7月16日取得, http://www.stat.go.jp/data/roudou/longtime/03roudou.htm#hyo_9) .
- 田麻裕祐, 2009, 「長期追跡パネル調査における継続・脱落の要因分析」『社会と調査』(2): 69-73.
- 和田修一, 1981, 「「人生満足度尺度」の分析」『社会老年学』(14): 21-35.

Married Women's Retrospective Life Satisfaction: Effects of Gender Role Attitudes in the Past and Experienced Career Patterns

Junko INUI

Abstract:

This study clarifies how married women's gender role attitudes and career patterns in the past affect their life satisfaction in their middle and advanced ages.

It has been found that when working styles are consistent with their gender role attitudes, their degrees of life satisfaction increase. For example, housewives who have traditional gender role attitudes and full-time working wives who have non-traditional gender role attitudes tend to be satisfied with their lives. However, the relationship between gender role attitudes and part-time workers' life satisfaction has not been clarified.

Meanwhile, cross-sectional data does not clarify the causal relationship between gender role attitudes and work status. In order to explore their relationships, the present study uses longitudinal data from a sample of 152 wives who were interviewed both in 1982 and 2006.

Using multiple regression analysis, the author states that the degree of retrospective life satisfaction of "part-time type career pattern workers" is lowest during the second wave, controlling for their gender role attitudes during the first wave and other socio-economic variables. Furthermore, "part-time type career pattern workers" who have more egalitarian gender role attitudes are the least satisfied with their lives.

Key Words : retrospective life satisfaction, gender role attitudes, part-time work, panel data